



嬉泉の新聞 第91号 2025年（令和7年）3月発行
発行＝社会福祉法人嬉泉
東京都世田谷区船橋 1-30-9（〒156-0055）TEL 03-3426-2323
<https://www.kisenfukushi.com> E-mail：kisen@kisenfukushi.com

鼎談：「課題を媒介とした交流」 ～心のケアとしての受容的交流療法～ 〈後編〉

阿部秀雄氏（日本抱っこ法協会名誉会長・袖ヶ浦非常勤講師）

×

石井 啓（本法人理事長）

沼倉 実（本法人療育援助統括理事）

今号は、第89号にて巻頭言「課題を媒介とした交流」をご寄稿いただきました、日本抱っこ法協会名誉会長 阿部秀雄先生と、社会福祉法人嬉泉理事長 石井啓、同療育援助統括理事 沼倉実との鼎談の様をお届けいたします。阿部先生は、長年に亘り、嬉泉福祉交流センター袖ヶ浦にて「心のケア」研修の講師をしてくださっており、そのテキストは法人として製本し、職員全員に配布をしています。

この鼎談は、上記巻頭言に加え、2024年3月に行われた社会福祉法人嬉泉の全体職員研修にて、阿部先生にご講義いただきました「本当の自分、本当の気持ち」、さらには、同研修での職員による実践発表の内容も加味し、嬉泉が大切にしている「受容的交流」の考えを、より一層深める機会となりました。

本誌では前号から引き続き、後編をお届けいたしますが、法人ホームページでは全編を掲載しております。通してご覧になりたい方は、法人ホームページ「嬉泉の想」コーナーに、是非アクセスください。



嬉泉の新聞 第90・91号 スペシャルコンテンツ

日本抱っこ法協会名誉会長

阿部 秀雄

×

社会福祉法人嬉泉 理事長

石井 啓

療育援助統括理事

沼倉 実

鼎談 (後編)
阿部先生×理事長石井啓×
療育援助統括理事沼倉 実

■「自閉症支援と子育ての社会的な状況」について

石井理事長(以下、石井)…先ほどの社会性の発達へのアプローチといいますが、そのあたりのところが今現在、自閉症支援って言われている考え方の中では、なかなか取り上げられていないように感じているところがあるんですけども。

特に強度行動障害のような状態にある人への支援っていうと、先ほどもお話ししたように、どうしてもその状態を落ち着かせるとか、そこで非常にドラスティックになってしまっているものを消失させるとか、そういうところが支援の到達点みたいなのところからなかなか離れないというか、むしろ落ち着かせて終わりたいないうところっていうのがあって。

確かに、冒頭袖ヶ浦の施設の話も少し出しましたが、日常の生活の中で、本人がそういうちょっと通常でないような状態であれば、それをなだめるとか落ち着かせるっていうところ

ろがどうしても先に来て、これはもう致し方ないことだと思うんですけど。



そこでいったんだめてしまうと満足してしまう、と言うと語弊があるのですが、そこからさらに社会性の発達支援っていうところに切り込んでいこうとすると、そのある種の安定を崩してしまうのではないかとというような危惧は、多分現場の職員もあると思うって。そこがやっぱりなかなか「社会性プログラム」っていうほうに行きにくい、うちであっても踏み出しにくいところなのかなっていうふうに思うんですけども。そこを阿部先生がおいでいただいて

いるセッションなんかでは、あえてそこから先のアプローチを教えてくださいださっているっていうふうに思うのですが、何かそのあたりでお感じになっていらっしゃることかありますか。

阿部先生(以下、阿部)…かろうじて安定を保つというのは、石井先生の表現を借りるとそれは「砂上の楼閣」のようなもので、何かきっかけがあり、状況が変わったりすると、崩れてしまうもの、という戒めになると思うんです。

それは自分たち自身への戒めであるとともに、シヨプラー流の支援の仕方、日本ではTEACCHとして紹介されているんですけど、TEACCHのプログラムへの批判もあるわけですが。

ちょっと脱線しますけど、石井先生の著書を拝見していますとシヨプラーとか行動療法とかいろんな流派の考え方に対して結構厳しくしているか、きちんと批判を展開しているんですね。それは否定して消し去ろうっていう意味合いは全然なくて、石井先生の基本的な考えは「色々な考えが登場して、それで切磋琢磨して深めていったらいいんだ」というお考えだったと思うので、あくまでもご自身の立場を明確にするっていう意味での

批判だったと思います。



石井…そのとおりで、多分そのあたりの立場の表明とありますが、TEACCHであるとか行動療法への、あえての批判っていうところがあつたと思うんです。けれど、今むしろTEACCHとか行動療法のある種の発展形態であるABA(応用行動分析)とかが、いわゆる自閉症支援のスタンダードのような言われ方をされてきているところがあつて。

もちろん私自身もそれを否定する立場ではないんですけども、ただやはりそれだけだとそれこそ「社会性プログラム」というところには至らない

だろうなと思うので、その辺をもう少し言っていきたいというか、嬉泉としてはそこがある種の依って立つところというか、嬉泉が目指している自閉症の支援の一つの方向性だということころを打ち出していきたいというふうに思っているんですが、そこがうまくかみ合わないというか。

そのあたりで沼倉さん、何か感じないですか。



沼倉理事（以下、沼倉）…マニユアルがあつて誰でもこうすればできる支援っていうのが、やはりもてはやされている状況にあるというのを感じます。

ただ、子育ての社会的な状況とか、

そういう流れでやはり「人が子どもを育てる」とか「人が人になる」とか、そういうような意味合いが、支援する側にも薄れてきていて、そういうった面でなかなかその本質的な部分に目が行かなくなっている状況っていうのがあるのではないかとというふうに感じるんですけども。

阿部先生、その辺の今の子育てとか親子関係とかついでいうところで関わっていらして、何か感じられるものは？

阿部…私は今、沼倉さんがおっしゃった「子育ての社会的状況」っていうのがとても気になっていて。

今まで自閉症の原因が心因か器質かついでいうことでもつばら論じられてきたのが、両方重なる部分もとても多いし、その重なる心因という部分が、個々の親の愛情とか育て方とかいう問題じゃなくて、それぞれの親が知らず知らずのうちに巻き込まれている子育ての社会的な状況、「子どもはこう育てればいいんだ」という社会的な風潮があつて、そこに巻き込まれているところも多分にあるのではないかとこのことを痛感しています。

ですから、自閉症の子どもも健全な子どもも含めて、広く育て直しを必



援をしていくことが大切な世の中になつていくかなと痛感しています。

（袖ヶ浦の研修では）ここで暮らしている利用者の方と、担当している支援員の方と一緒に来ていただいて、個別セッションの時間を持たせていただいているのですが、そこで支援員自身の生い立ちをちょっと振りかえってみてはという誘いも、ときにははします。そんな話が目の前の支援の関わりにどうつながるかというふうに話が持つていけたらと思つて。

■「袖ヶ浦での職員研修」について

阿部…やっぱり肝となるのは、子育ての場で言うと、子どもに向かつて「もうしたいんだよね、でもね、こうすることが大事なんだよ」と言う、「でもね」と切り返す子育てが大事で、これは受容的交流の考え方で言うと「自閉的な生き方をせざるを得ないんだよね、でもね、こんなふうにと人と関わったら楽しい暮らしが待っているんだよ」という、切り返しになつていくわけ。

個別セッションの場では、その上で利用者や担当の職員との関わりの中で「こんなことから始めることが可能じゃないか」ということを提案して試

要とする親子を相手に実践してきました。そういう（社会的な）風潮は、振り返るとここ30年以上も経っている話で、そうすると沼倉さんがおっしゃったように支援に携わる若い職員自体がそういう風潮の中で生まれ育っているつてことは多分にあると思

います。ですから支援の出発点として、支援者自身が自分の生い立ちを振り返るような作業も併せて行いながら支



みて頂きます。(先日の全体研修の例で言うと)その人なりに無難に日々を過ごしていくような術を見つけて、そういう意味では安定している暮らしをしている方なんですけど、「でもね、こういう暮らし方もあるんだよ」ということを話して「ちよつと試してみない?」と誘いました。何をしたかと言うと、まずはその人に触れることから始めて、肩に触れ、腕に触れ、手に触れました。触れることさえも避けるようになっていた方なので、誘うと避けられますから。「ああ、嫌なんだね」と受け止めた上で、「でも、やっぱり寂しいな」と、また誘っていくうちに、触れていられる時間がだ

んだん長くなって、触れるということに許してくれるようになりました。

それなりに折り合いが付いた状態で、自閉的な構えはまだまだ崩さないけれども、触れられるのは許容してくれました。そこまで来ると、またこちらの欲が出て、今度はちよつとこつちに寄りかかってみませんか誘うと、またそこで嫌われるというか避けられて：というやり取りを丹念に続けていく。

色々な人とかわりばんこにお付き合いしますので、月に一度ぐらいしかチャンスが回ってこないんですが、何か月かそういう誘いを丹念に続けた末に、最終的には寄りかかって身を委ねるわけなんですけど、そこは無理強いていませんので。

石井先生が強調しておっしゃっていた「こちらがこうしてほしいって誘うが、本人が自我関与して心から納得する、そういうやり取りが大事だ」っていうことを、念頭に置いてやってきたつもりなので、身を委ねた時点で心も委ねるような状態になっている、人に身を委ねる心地よさ、安心感をそこで味わってもらえたわけです。

すると日常の様子がそれとなく変わってきて、その人のほうから担当の職員に寄ってきたりとか、ついこの間、

聞いた話では、学園から帰宅したときに様子が変わっていて、ご両親いわく「何か関わり方が変わってきているのでそれをどう受け止めたらいいかこつちも受け止めあぐねている」ということをおっしゃっていたという、そんなうれしい話もあって。



石井…長年の固定的な関係が変わってきて、逆に親御さんのほうがそれ

を戸惑っている。

阿部…だから、そういう戸惑いっていうのは施設でも担当の職員や周りの職員も感じているところだと思うんですが、そういう戸惑いがある意味では安定を乱されたっていうところにもつながるわけです。いい意味での戸惑いだと思うんですが。

ところが、こちらも(誘い方の)上手下手がありますから、誘い足りないぐらいならまだいいんですけど、時には「もう少し誘ってもいいんじゃないか」欲張って、こちらの誘い方が度を超すと、誘われたほうもちよつと不安定になり、「どうしようかな」というような状態になりますので、そういうことでご迷惑をおかけしたことも多々あったと思います。

沼倉…最初のほうで先生がおっしゃった交流を続けていかないと、なかなかそういう、特に自閉症の方なんかは自己防衛の生活形態とか、周りの人も安定を乱すのを避ける接形態とか、そういうのが固まっていつちやうとだんだん自分を発揮できなくなっていく状況になりやすいっていうことにもつながってくるんですね。

阿部…そうですね。もっと幼い子どもだったら自閉のままにとどまるか、関わりの世界に行くかという単純な葛藤ですけど、もう40歳、50歳になつてくると「こう生きていくんだ」っていうような信念のようなものも強固になりますから、そこで改めて誘われても、「ええ？そんな誘いに今更乗っていいのか？今更乗つたらどうなってしまうんだ？」という戸惑いが大きいと思います。「今あなたはそう誘っているけど、一時の誘いじゃないのか？本気でこれからもずっとその関わりを続けてくれるのか？」とか、そういう不信感もあるかもしれないし、乗り越えるまでの葛藤は容易なものじゃないと思います。だから数カ月かかったのも無理ない話で、その間、私は月1回誘うだけですけど、日常でも同じ様に担当の職員がしっかりと関わってくれたっていうのが大きな力だったと思います。

石井…そういう葛藤とか心の動きっていうのは目に見えないので、それに身近に触れている経験があるとかそういう考え方をちゃんと学んでいるとか、そういうこと（下地）があると割と理解できていくと思うんですけど



も、なかなかそれがちょっと離れたところにいる人に伝えていくっていうのがすごく難しいと思っていて。何かその辺で伝えていく術みたいなものがないものかというのを考えるんですけども、先生のお考えはいかがでしょうか。分かってもらおうっていうところで。

阿部…こちら（袖ヶ浦）に在職して2年目の方を対象に1年間研修をやらせていただいでいて、最後の第5回目の研修がこの間終わったばかりなんですけど、その中の3人の方が毎週お伺いしている個別の時間に来ていた方でした。

最終回にはその3人の方に、私と

の個別の時間にお付き合いしてどうでしたかというようなことを含めて話していただいたんですが、やっぱり個別セッションの場ですと、例えば自閉症の人でもちゃんと我々と変わらない人間性があるんだよということが実感しやすいわけですよ。それは石井哲夫先生もおっしゃっている話ですが、こちらからあることを語り掛けるとそれに対して目に見える反応を返してくるのをつぶさに見ることができませんから。

また、こういう関わりをするところんなふうに変わっていくんだという思いがけない体験をする。やっぱりこういう個別の場というのは支援者の認識が変わっていくのに大きな役割を果たすのかなって思います。

■「石井哲夫の残したもの」について
石井…やっぱり、なかなかそういう実践に触れないと難しいですよ。

阿部…難しいんじゃないでしょうか。少なくともそれを言葉に表してというか、言葉や文字だけでもそういうことを伝える努力をしていったらいいと思うのですが。

そういう意味では石井先生がな

さつてきたことっていうのは、一見何も無いようなところからダイヤモンドのような宝石を掘り起こしてきたのだと思います。



石井先生って言ったたら、「ああ、あの受容論か」で済まされるくらいがあります。もちろん石井先生ご自身も受容は大切だと繰り返しおっしゃっているわけですが、先生が掘り起こ



したダイヤモンドは1個じゃないわけで、受容論しかり、自我の二重構造説もそうですし、それから葛藤を乗り越えるための課題を仲立ちにした交流論、その葛藤を乗り越えるにあたって支援者、利用者、お互いの自我関与が大事だということの強調もそうだし、葛藤を乗り越えるのに情緒を明らかにしてそれをなだめることが大事だとか、いろんな宝石を掘り起こしているんですね。

まだ数え上げれば他にも出てくると思うんですが、そうやって掘り起こしたダイヤモンドを一つの理論として、宝石細工として組み立てたというのが受容的交流療法の理論だと思います。

います。一生をかけてそれを成し遂げて私たちに残してくださったと思うんです。でも、実践によって掘り起こしたものを理論として組み立てることで精いっぱいだった、と言ったらおかしいですけど、今度はそれを誰もが身に付けて実践に移せるようにするという作業が残された私たちにとっての課題なんじゃないかと思っけていて。

沼倉…そうですね。そういう意味では、本当に阿部先生の作っていただいたテキストは道しるべとさせていたただくような内容で、ダイヤモンドを磨いて見せていただいている感じがします。その先、本当にわれわれがどこまで成し遂げられるかはちょっと不安なところはたくさんあるんですけども。

石井…なかなか再現性といいますが、決まった形にするともう、はたから違っていくようなところもあるように感じているので、そうすると技術的な体系化がしにくいとか、ノウハウのように「こうやればいい」みたいなものってのがなかなか表せないっていうところに今直面している気がします。そのあたりで非常に悩ましいといいますが、どうしていったらいい

んだらうってとても途方にくれているようなところがあるんですけども。

阿部…一つには、理論化されていると良いながら、石井先生の実践には名人芸のようなところが多分にあつて、先生ご自身も芸術家の仕事に例えていられるところがありますよね。

石井…そうですね。



阿部…ですから、芸術家の仕事ってというのは血のにじむような苦労をして仕上がっているんだけど、でも再現性ってことで言えばとても難しい話になるわけで、でもそれでいいじゃ

ないかっていうふうに居直っていらっしゃっていて、その通りだと思っけています。

ただ一方では石井先生の名人芸っていうのはあるけれども、もつと身近な、まだこの仕事を始めて数年っていう若い人なりの、その人なりの「名人芸」が考えられると思うので、だからその人らしさを発揮した名人芸を支援していけたらと思っけています。

それには昔の職人芸のように親方の背中を見ながら、ときには盗みながら自分の技を、というのはちよつと今どき酷な話で、だからといって「こうすればいいんですよ、こうすればできますよ」っていうふうに単純化してしまうと受容的交流療法がとて薄っぺらなものになってしまいます。そうじゃなくて、「こんなふうにしていくとあなたなりの名人芸っていうのが出来ていきますよ」というような、そういうマニュアルは可能なんじゃないかなって感じがしています。

また一つには実践記録、自閉症の人とこう関わってこういう喜びを共に感じたっていうような、読むことで感動を呼ぶような、どうしても実践記録っていうと客観性を貴ぶ、悪く言えば読むほうも無味乾燥なものにな

りがちなので、わくわくして読めるよ
うな、そんな実践記録っていうのを打
ち出していく。生の実践を見られない
立場にある人たちにはそれも一つの道
筋かなと思います。ですから、そうい
う発信を嬉泉からぜひ、していって
いただきたいなと思います。

石井…それこそ職人芸に例えられま
したけど、その職人の道に入っていく
ためのガイドみたいなものと、それか
らその職人の道を究めていく過程で
のその人の体験というか、ある種の主
観に基づいた記録で感情移入をして
もらうっていうような方向性でしょ
うか。

先生のお話ですごく勇気づけられ
た思いがしまして、やはり嬉泉の価
値っていうのはそれこそ石井が掘り
起こしたダイヤモンドをちゃんと磨い
ていくことなんだっていう、先生のお
言葉がやっぱり一つの指針となるなと
いうふうに、すごく今感じています。
では、沼倉さん最後に。

沼倉…改めて、受容的交流とか心の
ケアっていうのを考える機会を頂い
て、本当に利用者さんとの交流の原
点というのを外さずに、そこがぶれ

ないように継承していくっていうのが
一番の道なのかなというふうに思い返
しました。ありがとうございます。

石井…今日は長い時間にわたってお話
しいただきましてありがとうございます
ました。

左記のQRコードより、
本対談を掲載した特設ウェブサイト
にアクセスすることができます。



「職員の声」
阿部先生の講義を受けて

■ここでは、2024年3月に行
われました全体職員研修にて阿
部先生にご講義いただきました
「本当の自分、本当の気持ち」を
受講した職員の感想を一部ご紹
介いたします。

・講義の中で「育て直し」という
言葉がとてもしるに残りました。
「子どもと親をつなぐ支援」
「事情があつて見失っていた元々
の姿を取り戻す支援」
「心の
ケア」。とても深い話で、仕事で
利用者さんに対してだけでなく、
自身の子育てでも参考にしたい
ことがたくさんありました。ま
た「葛藤を伴うやり取り」を大
切に！ということ、日ごろの
やり取りでも実践したいと思
います。

・泣きの忌避について、とても納
得できました。葛藤を伴うやり
とりや泣きは、じっくり受け止
めていくことが必要なこともわ
かっていても、時間に追われた
り、人目が気になったりで、つい

回避したくなっていたように思
います。その時間こそが受容的
交流の醍醐味と思つて頑張りた
いと思いました。

・「子どもに寄りそう」ということ
ばは、よく使いますが、私自身
も「本当はどうしたかったのか
な」といった問いを自分に投げ
かけることがよくあります。そ
の子が本当はやりたいたい！でも一
人じゃできないというのであれ
ば、安全基地とした役割をした
うえで、あと一歩をどう押して
あげる関わりを考えていきたい
と思います。



「KISENと繋がる」
— 支援現場と協働した
2025新卒採用活動について

昨年度、広報係ではホームページの刷新、インスタグラム開設等、情報発信の新たな仕組み構築が進み、それに伴ってKISEN採用活動も新たな展開を迎えることになりました。

本部事業部・職員採用係は、石井理事長より「新卒に向けた採用活動を軸に」との命を受け、活動計画の見直しを図りました。新卒の就活早期化が進む福祉業界において、学生の動きはシンプルなものから複雑化してきています。それに伴い採用側も単に「人数を集める」だけではなく、学生一人ひとりの動きや、時期に合わせたアプローチを重要視する必要が出てきたのです。そこで職員採用係としてKISENの認知度を上げ、接点を持つ機会を拡大することを目的として企画を再検討しました。具体的には、「KISENと繋がる就活」をテーマに、まずこれまでの集合型セミナーを見直し、オンラインを活用。インスタグラムでの告知や、ホームページにて個別型のオンラインセミナー・相談会の募集、学生一人ひとりへ細



かに対応できるようにしました。

また、新たにインターンシップを開始し、これには18名の学生が応募してくれました。その体験談をインスタグラムで発信することで、養成校等からの応募メッセージや学校訪問等活動の範囲も広がりました。

その結果、年間160名近い学生と出会い、そのうち40%ほどの学生が採用への応募に繋がりました。これまで通り母集団となる人数は確保しつつ、誘因率が前年比160%を超えた要因は、若手管理職や入職3年目程度のリクルーターによる、「支援現

場」「働き甲斐」を中心としたリアルな就職観を伝えられたセミナーにあると自負しています。

さらに、一次面接についても学生のニーズに合わせオンラインを活用するとともに、全拠点に面接担当者を配置。これにより、応募から採用までの選考日数を平均11日と過去最短の時間で進行し、他法人との差別化を図ることができました。

そして、内定者に対しては内定後の個別面談を複数回実施。安心できる就職の実現までを、採用担当者が丁寧にフォローアップし続けることに注力しました。内定後の職場体験では、内定者が現場の職員と「支援現場の本質」をわかりあえることを目指し、すべての内定者が複数の事業所を体験。これは内定者、現場職員双方にとって、福祉職員として働き甲斐を感じながら働き続けられる人材育成体制の構築へと繋がる、貴重な体験になったと実感しています。

KISEN新卒採用は、2025年度新たに18名を現場に繋ぐことで役目を終え、いよいよ、「KISENと繋がる2026卒」幕開けです！
ひとりでも多くの学生が採用に繋がることを期待しています。

(本部事業部 職員採用係 植村文)

嬉泉を、寄付でご支援ください。

嬉泉が運営する25事業の利用者に向けた改善、よりよい環境や施設の充実・施設の円滑な運営などを、物心両面から支えていただくために、ご寄付を随時、募っております。

ご協力いただいた寄付金は、より良い支援の質の向上と福祉人材の育成・定着を中心として、法人の活動に活用致します。

*寄付金控除の対象になります。

*2023年度実績 11,025千円 職員採用、研修費用等に活用

お申込みは嬉泉 HP のお問い合わせフォームよりお願いします。 →

